



J.Y.P.S.
Japan Youth Platform for Sustainability

報告書

JYPS海外派遣成果報告会

～2030アジェンダ達成に向けたユースの挑戦～

持続可能な社会に向けたジャパンユースプラットフォーム
イベント統括 山口凜

1. イベント概要	1
2. 背景	2
3. プログラム	2
4. イベントハイライト	3
5. 今後の展望	3
6. 注記	4





J.Y.P.S.
Japan Youth Platform for Sustainability

1. イベント概要

タイトル: JYPS海外派遣成果報告会

～2030アジェンダ達成に向けたユースの挑戦～

開催時期: 2024年12月15日(土)

開催時刻: 13:30~16:00

開催場所: 渋谷キャストスペース(〒150-0002 東京都渋谷区渋谷1-23-21)

Zoomでのオンライン配信(第一部のみ)

参加登録: Google Forms を使用

総参加者: 約45名

主催: 持続可能な社会に向けたジャパンユースプラットフォーム (JYPS)

後援: 環境省、外務省、2030生物多様性枠組実現日本会議(J-GBF)、

(一社)SDGs市民社会ネットワーク (SDGsジャパン)

2. 背景

2023年、2015年に策定された「2030アジェンダ-持続可能な開発目標(SDGs)-」は折り返し、2030年までの「行動と変革」の7年間に突入しました。JYPS事務局では、行動と変革の7年間の始まりとして、未来サミット、第8回北東アジアマルチステークホルダーフォーラム(NEA)、国連気候変動枠組条約第29回締約国会議(COP29)の3つの国際会議に事務局員を派遣しました。それぞれ「意味あるユース参画」を主軸に、アドボカシー活動に取り組みました。現地での活動内容を紹介すると共に、派遣者が感じたユース参画における課題について発表します。

本イベントの開催目的は以下の通りです:

- ユース参画推進の底上げ
 - ユース参画の推進に向けた取り組みを強化し活動していることを紹介、その重要性を広く訴えるため。
- 他セクターとの協働
 - 他セクターの参加者をお呼びし、協働して活動していくための方法や、互いにとってメリットのある関係性の構築を模索する
- 日本ユースへのエンパワーメント
 - 国際・国内会議への参加方法やアドボカシープロセスを共有することで、アドボカシー活動に取り組む日本ユースへとエンパワーメントに繋げる

本イベントを通じて、ユースの積極的な取り組みを広め、日本における「意味ある継続的なユース参画」を促進していきたいと考えています。

3. プログラム

司会: JYPS 普及啓発部 村越りり

13:30-13:45 開会説明

開会挨拶(JYPS共同事務局長 森井悠里香)

第一部

13:45-14:15 各会議派遣者より会議についての発表(各10分×3)

1. 未来サミット



J.Y.P.S.
Japan Youth Platform for Sustainability

2. NEA
3. COP29

14:15-14:55 質疑応答

14:55-15:00 休憩

第二部

15:00-15:50 ブース形式での発表・交流会

1. JYPS事務局の紹介
2. 未来サミット
3. NEA
4. COP29

15:50-16:00 閉会式

開会挨拶(JYPS共同事務局長 本行紅美子)

4. イベントハイライト

今年度JYPS事務局が参加した国際会議での活動内容について紹介しました。各会議においては、「意味あるユース参画」を主軸に据え、アドボカシー活動に取り組みました。現地での活動内容を紹介するとともに、派遣者が感じたユース参画における課題や、得た知見・反省点・今後の課題を発表しました。

また、4月から6月にかけて、オンラインでの意見収集やインタビュー、イベントの開催を通じて包括的に日本のユースの意見を集約し作成した「ユース視点での日本のSDGs達成状況分析」の紹介に加え、各会議の活動報告書を発表しました。

当日使用した活動報告書 / デジタルパンフレットはJYPSホームページよりご覧いただけます。(<https://www.jyps.website/post/海外派遣成果報告会デジタルパンフレット>)

5. 今後の展望

渡航中および前後に行ったアドボカシー活動が、今後どのように政策に反映されるのか、引き続き注視していきます。また、得られたコネクションや情報を活用し、より具体的な政策提言を行なっていきます。

本イベントを通じて、広報における実力不足を痛感しました。プレスリリースの掲載やInstagramでの広報に加え、より効果的な手法や発信方法を模索していきます。さらに、イベントを企画する際には、「参加するインセンティブがあるのか」を常に念頭に置く必要性を感じました。そのため、次回以降は内部のキャパシティビルディングにも注力します。

来年度日本政府が実施するVNRに向け、より一層アドボカシー活動に力を入れていきます。そして、2024年に実施した一連の活動が、SDGs達成に向けての日本のユースのアドボカシー活動を養成する機運に繋がることを期待しています。

6. 注記

本イベントは、地球環境基金ならびに公益財団法人電通育英会の助成金を使用し運営しました。